

011-45

インタビューガイドによるプリセプター経験の振り返り

日本赤十字社長崎原爆病院 婦人科¹⁾、
日本赤十字社長崎原爆院²⁾

○花岡 ふみ¹⁾、坂本 紘子¹⁾、野口 聡子²⁾

【はじめに】 当院での新人看護師教育体制は、新人看護職員研修の理念と基本体制をもとに研修体制が構築されており、新人看護師教育プログラムとしてプリセプターシップ制度を導入している。プリセプターは、自らの業務と平行し新人看護師指導を行うため負担が大きく、悩みながら指導を行っているのが現状である。そこで、プリセプター経験のある看護師5名を対象としてインタビューガイドを用いて当時を振り返ってもらい、指導時に何が重要なのかを調査したので報告する。

【調査結果および考察】 研究対象者は、指導方法は正しいのか・どうしたら相手に伝わるのかと悩んでいた。その対応として、先輩看護師に相談したなどの行動をとっていた。そして、一方的な指導ではなく、新人看護師の理解度・行動の根拠・思いを把握・理解し、新人看護師自身を受け止める事が必要であると振り返っていた。これらの事から、指導方法においてコーチングや指導技術も必須であるが、新人看護師の理解と状況の把握も重要である事がわかる。そのためには、聞き取り調査結果からも、プリセプターには十分なコミュニケーション能力が求められる事が明らかとなった。また、プリセプターは、新人看護師指導に対する責任の重さを感じていた。年間を通した指導や、日頃の指導が長時間に及ぶ事で心身ともに苦痛を感じており、研究対象者全員が辛かったと回答した。しかし、周囲からの支援を受け、病棟全体で新人看護師を指導する事で、プリセプターの新人看護師指導に対する負担軽減に繋がっていた事が明らかとなり、当院での教育体制により有効な支援が行えていると考える。

011-46

放射線治療室看護師の思いと看護ケアの現状

熊本赤十字病院 画像診断治療センター

○桑原 珠世、奥村 恵理

放射線療法は、QOLを維持して治癒を狙えるがん治療として、その重要性は急速に高まっている。根治目的から症状緩和の目的まで適応となる患者は幅広く、放射線療法を受ける患者数は年々増加傾向にある。放射線療法看護は、安全管理・IC時の診療の補助と補足・オリエンテーション・不安への対処・セルフケア支援など、さまざまな看護が必要な場となっている。当院の放射線治療室の看護師は、画像診断治療センターに所属する20名のうち7名が担当している。がん放射線療法認定看護師を中心に交代で勤務しており、患者数や状況に応じて応援体制をとりながら、患者への対応を行っている。しかし、基本的には看護師1名の常勤体制で上記看護全てを行っており、1日40名前後の患者の情報把握、また継続ケアへ難しさを抱えつつ看護を行っている現状である。治療室担当看護師より「患者の把握が難しい」「なかなか話せない」との声が聞かれ、治療室看護において困難さを感じているのではないかと考えた。今回、放射線治療を受ける患者との関わりと看護師の思いを明らかにする目的で、当院の看護研究倫理委員会の承認を得て、放射線治療室担当看護師5名に半構造化インタビューを行い、現状調査を行った。調査の結果、『治療継続、完遂を支える援助』『有害事象に対するセルフケアへの支援』『治療場面における援助』『治療室内でのコーディネーターとしての役割』『短い治療時間の中での関わり』の困難さ」というカテゴリーが抽出された。当院の放射線治療室看護師の放射線治療を受ける患者との関わりと看護師の思いが明らかとなり、今後の放射線治療室看護への示唆を得た。

011-47

当院健康祭りで抗がん剤の副作用による外見変化へのケアの重要性を伝える試み

石巻赤十字病院 看護部¹⁾、看護部²⁾、遺伝・臨床研究課³⁾、
地域医療連携課⁴⁾

○玉置 一栄¹⁾、紺野 志保²⁾、安田 有理³⁾、佐藤 京子⁴⁾、
佐藤 恭子³⁾

【はじめに】 各施設において、抗がん剤治療の副作用による脱毛などの外見変化に対する支援が試みられている。当院では、外見変化に対しては頭髪の脱毛ケアが主であり、まつ毛や眉毛の脱毛による顔の変化に対するケアは十分とは言えない状況であった。そこで、病院主催の健康祭りにおいて、乳がん看護認定看護師が中心となり、外見ケアの重要性や医療的要素を含むメイクアップについて伝える「メイクアップコーナー」を企画し、開催を試みた。

【実際と方法】 「メイクアップコーナー」の企画・運営は、趣旨に賛同する多職種の病院職員で行った。講師は、医療や福祉の知識に基づき総合的なエステティックを行うソシオエステティシャンに依頼した。はじめにソシオエステティシャンから抗がん剤による外見の変化が心に及ぼす影響について説明後、ソシオエステティシャンのアドバイスにより参加者が実際にメイクアップを試みた。参加者の反応は自記式アンケートにて調査した。

【結果】参加者は18名で、その約3割ががん患者であった。アンケート調査の結果、全体の約9割が外見ケアとしてのメイクアップを理解できたと答え、約9割が今回の参加が役立つと回答していた。

【考察】 今回の試みから、外見変化に対するケアとしてのメイクアップは、がん患者のみならず一般にも関心が高いことがうかがえた。このことは、ソシオエステティシャンを講師とし、医療的観点から説明がなされたことも理由の1つと考えられる。日常診療において外見変化に対する継続的な支援の重要性が再認識された。今後、院内においても支援体制を整備して行きたい。

011-48

ターミナル患者を支える家族のニーズに対する看護介入

福岡赤十字病院 消化器・肝臓内科

○田上 奈緒美

【はじめに】 がん体験において不安が増強しやすい時期は、治療の開始・終了時、病状の進行・転移時、治療法がなくなり緩和・ホスピスへの移行時だと言われている。これは患者だけではなく、患者を支える家族にも当てはまると言える。今後の家族支援に繋げることを目的とし、今回未告知の段階から告知を経て、旅行に行くという患者の最期のニーズを満たすことが出来た事例を通して、看護介入がどのような影響を与えたのか考察した

【事例】 70代男性、肝臓がん再発（初発時肝切除あり）。門脈・胆管浸潤により閉塞性黄疸に伴う急性胆管炎にて入院。家族背景として妻は他界、7人の子供（長女がキーパーソン）、内縁の妻。

【結果】 入院時主治医より家族へ、看取りを含め緩和医療を検討する必要があるとの説明が行われ、家族の意向もあり、その日のうちにMSWと調整を行いホスピスについて面談してもらった。本人への告知に対し、長女の受け入れがなかなか出来ず、そのつど主治医と話が出来る場をセッティングし、面会時には積極的に思いを傾聴した。その結果長女の受け入れも進み、本人へ告知、告知後旅行へ行きたいと申し出があり、急変覚悟の上で家族全員で2度旅行へ行くことが出来た。旅行の翌日ホスピスへ転院となり、転院後1週間で患者は亡くなった。

【考察】 患者・家族を1つの単位として捉え、現実を受け入れられない時期では、情報を与え説明を繰り返すことで、家族は患者の死を現実として捉えることが出来るようになる。今回は患者・家族共に転院を希望した事例であったが、訪問看護などのサービスを整え、在宅で最期を迎えることも選択肢のひとつとして考えられるため、患者とその家族の個性に応じて介入していくこと、また残された時間が残りわずかであるということを常に意識した関わりが重要である。

一般演題
10月17日(金)
(口演)